
氷の悪魔

はりがねん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷の悪魔

【Nコード】

N3810Y

【作者名】

はりがねん

【あらすじ】

『氷の悪魔』と呼ばれるようになった少女の話。
一話一話は短いです。

少女に名は無い。そもそも、名などあっても誰も呼ばない。「おい」とか「お前」と呼ばれれば、それで事足りるのが常だった。

少女の生まれた地域は一年のほとんどが白い雪で覆われている。作物は育たず、人々は獣を狩って生活していた。親のいない少女は仲間に入れてもらえず、一日を生きるにも精一杯だった。

雪で覆われているため食べられるような植物もなく、少女に出来る事と言えば、大人たちの目を盗んで食料を掠め取る程度が精々だ。当然、見つければひどい折檻が待っている。それで死にかけたのも一度や二度の事ではない。だが、生きるためにも、やめる事など出来なかった。

しかしある日、少女は偶然にも精霊術（精霊から力を借りて行使する術であり、精霊に依存する）を使える事を知った。

——氷の精霊術

それ自体は大して珍しくない。しかし、少女は魔力の保有量が多かったのか、大規模の精霊術も使う事ができた。その事に少女は歓喜する。

死に物狂いで精霊術を磨き上げ、その日の食べ物を盗むのではなく、奪い取る手段を手に入れた。

暖をとるために洞窟で縮こまるのではなく、人々から服や家を奪い取る事を覚えた。

襲い来る者たちから逃げ回るのではなく、返り打ちに出来るようになった。

無い物を作る事は出来ない。そんな技術もない。

少女に出来るのは奪い取るだけ。

出来なければ待つのは死のみ。

それが少女を取り囲む日常だった。その事に少女は疑問を覚えなかったし、疑問に思う必要もなかった。今までと何も変わらないのだから。むしろ、少女は自身が恵まれている事を自覚していた。

寒さに耐えきれず、凍え死ぬ者を何度も目の当たりにしている。食べ物を手に入れられず、餓死していく者を何人も見ている。

だから自分はずっと恵まれていると思った。

精霊術が使えるから、凍え死ぬ事もない。強い力を持っているから、餓死する事もない。

けれど、特にその事を感謝した事は無い。なぜならそれは、当然の事だから。

——もっと、強くなりたい。

いつしか少女はそう願うようになった。

— 02 — (前書き)

流血描写あり

しばらくして、少女の周囲には誰もいなくなった。全て少女が奪い尽くしてしまったためである。

少女は住み着いていた土地を離れ、より人が多く集まる場所を目指した。

人のいる場所を探すのは簡単だった。雪が踏み均ならされている場所を歩けば、人のいる土地に行く事が出来るのだ。道に迷う事はなかった。

少女は街、と呼ばれる場所へと辿り着く。

いつものように寄ってくる人々を精霊術で返り打ちにし、持ち物を奪う。何もしなくても、食料と衣服は向こうからやって来るのだ。探す手間がなくて、以前と比べれば非常に楽な生活だった。

少女はお金、という存在をこの時に知る。腹の足しにもならない、小さな鉱石で食料を手に入れる事が出来るのは不思議だった。しかし、無駄にかさ張る上に重いので、少女はお金を持ち歩く事を厭った。元より、待っていれば向こうからやってくるのだ。わざわざ持ち歩く必要もない。

街に着いてから少女は、寄ってくる人々を返り打ちにしては持ち物を奪い、奪ったお金を使い食事を食べ、宿をとってのんびりと休む。そんな生活を何日も繰り返した。

そのせいか、始めは何もしなくても寄って来ていた人々が、ある日を境に一気に激減するようになった。少女は自分から相手を探さなければなくなるが、街は人が多いため獲物には困らない。

少女はそんな街を好ましく思った。

そんなある日、街を歩いていると、少女は武装した人々に囲まれ

た。

「なに？」

少女は言葉少なに尋ねる。

武装した人々は少女を警戒しながらも、高らかに宣言した。

「窃盗、強奪、暴行、殺人の容疑で貴様を捕らえる！ これは国の決定であり、拒否権など無い。大人しく従うがいい」

「なに、それ」

少女は眉を顰める。

言葉の意味は全く理解できないものであり、ただ相手から伝わってくる嫌悪感のみを感じ取っていた。そこから、漠然と少女にとって良くない事なのだろうと推測する。

「わたし、あなたが嫌いだわ」

呟き、少女は親指で何かを弾く。一際目立つ武装を身に着けていた男の眉間に、それは命中した。男は凍ったように硬直し、後ろに倒れ込む。その額からは血が溢れていた。少女を取り囲む人々は何が起こったのか分からず、ざわめいている。

「あなたのそれ、重そうだからいらない」

少女は倒れた男から何も奪う事なく、その場を去る。囲んでいた人々は、無言で少女に道を開けた。誰も少女を追いかけてようともし、ましてや捕まえようとははしない。固まったようにその場に佇んでいるだけだった。

— 03 — (前書き)

会話文なし

少女は歩き慣れた街の道を歩く。周囲の人々は少女の視界に入らない様に、自然と道の端に寄っていった。ここ数日で見慣れた光景である。

少女が騎士団、と呼ばれる武装集団を追い返してから三日経っていた。

街の人々はそれ以降、少女の事を避ける様になったのだ。その前から少女の事を遠巻きにしていたものの、話しをすれば恐る恐る言葉を返してくれたし、商品も売ってくれていた。

しかし今では口を開こうともしないし、目も合わせようとはしない。もっとも、商品は売ってくれるので特に問題は感じられなかった。それに、それ以上に大きな問題がある。

今まで少女に襲いかかってきた人々が、街の人以上に強い警戒心を持つようになったのである。

そのため、少女は獲物を探すのに、より一層の苦労を強いられるようになったのだ。これまでは探せばある程度の獲物を見つける事が出来たものの、今では滅多に見つける事が出来ない。少女にとっては困った事である。

かといって、全く抵抗出来ない者を対象にするつもりはなかった。無差別に襲い、集落を一つ壊滅してしまった事があるのだ。壊滅させてしまうと、食料が手に入らなくなる。そうになると、少女も移動しなければならぬのだ。余計な手間である。なので、無差別に奪っても、得になるとは限らないと理解していた。

しかし、このままでも状況は変わらない。なんらかの行動を起こさなければ、再び餓死する危険が出てくるのだ。

——もっと、もっと強く。

街に来てから大規模な精霊術は使っていない。少女は精霊の姿が見えないものの、周囲にいる精霊が術を使うのを心待ちにしているのを感じ取っていた。精霊の願いはなるべく叶えたい、と少女は思う。精霊のお陰で少女は生きていられるのだ。その恩を返したい、と思うのは当然のことである。

だが、今の生活を破壊すれば、再び移動する必要がある。少女は破壊衝動を抑えつけ、日々を過ごした。

獲物が見つからない日は仕方なく、近くにいる人から奪い取る事にした。なるべく穏便に済ませるため、少女は微笑みを浮かべ、やんわりとそれとなく要求する術を覚える。力尽くで奪い取った時よりも量は少ないが、それでも十分だった。

以前に比べ、穏やかな日々を少女は送るようになった。

しかし、それを旅人に尋ねると、なぜかほとんど全員が襲いかかってきた。少女はそれを不思議に思いつつも、喜んで返り打ちにする。この事から、少女は旅人を中心に狙うようになった。すると、なぜか街の人々の態度が軟化したのである。

少女はそれを不思議に思いつつも、深くは考えなかった。

— 04 — (前書き)

03に至る過程の一部。

大通りから少し逸れた路地の中で、一組の男女が話し合っている。薄暗い人気のない路地の中。それに加えて男女、という組み合わせであれば普通、一つの事しか思い浮かばないかも知れないが、この二人に関してはそれを全く感じさせなかった。

そもそも女の方は、まだ少女と言って差し支えがない。白銀の髪に、水のように澄んだ青色の目。寸法の合っていない服を何枚も重ね着し、寒さを凌いでいる。元々外見に頓着しない性格なのだろう。髪は櫛を通した様子がなく、乱れている。それにも関わらず、少女は氷のような凜とした美しさを感じさせた。

それに対し、男は三十路をいくらか過ぎている様に見える。ふけだらけの髪に、野放図となっている髭。さらには垢と埃で汚れた黒っぽい服。それに加え、男は異臭を放っていた。一目見て、即座に視線を逸らしたくなるような人種である。

とてもではないが、お互いに恋愛対象としては見えないだろう。

当然、二人の会話も全く色気のないものだ。

「だからよお、もう少し柔らかな言葉遣いにしろよ」

どこか呆れた様な男の言葉に、少女は意味が分からないと首をかしげる。

「それは、具体的にどうするの？」

男は頭を掻く。その拍子にふけが飛ぶが、お互い気にした様子はない。元々、少女は男から少し離れた場所にいる。そこまでは飛ん

で来ないのだ。

「いいか。さっきも言ったように、お前さんは容姿に恵まれてるんだ。どうせだったら、もっとそれを有効活用しろよ」

「どう有効活用するの？」

「花街って知ってるか？」

突然、話が変わったが少女は気にした様子もない。しかし言葉の意味が分からず、少女は首をかしげる。男はやっぱりな、と軽く溜息をついた。

「花街ってのは……まあ、簡単に言うと、男と女が仲良くイチャイチャする場所だな」

「イチャイチャ？」

少女は眉を顰め、一体なにを言っているんだ、と表情で物語る。見た目は綺麗な少女にあからさまな視線を投げられ、男はたじろいだ。咳払いをし、気を取り直す。

「要するに、だ。お前さんの容姿を最大限に活用した上で、より楽に獲物を仕留める方法がそこにあるって事だ」

「始めからそう言えば良いのに」

少女は呆れた様な視線を男に投げる。男は困ったように頭を掻いた。

「いや、厳密にはちよいと違うが、近いモノがあると言って問題ないだろ」

「ふうん。それなら、その方法とやらを聞きに行ってくるよ」

少女は男に背を向け、花街へと向かう。
その背を見送り、男は安堵の息をついた。

「……死ぬかと思った」

実はこの男、先程の少女に強請^{ゆす}られていたのである。しかし、見た目は綺麗な少女のあまりにも素っ気ない言葉に、思わず異議を唱えたのだ。

もっと夢を見させろ、と。

少女は怪訝そうな視線を男に向け、気まぐれに男の話を聞いたのである。その事によって、男は命拾いをしたのだ。

もっとも、花街で新しい術を覚えた少女によって被害が増大するのだが、それはまた別の話である。

男の言葉により、少女は花街へとやって来た。街の中でも一際華やかである場所に、少女のような服装をしている者は浮いているのだが、本人は気にした様子もない。堂々と道の真ん中を歩きながら周囲を観察している。

時折、嫌な雰囲気を纏った者が近付いて来るのだが、少女はそれらを容赦なく精霊術で迎撃していく。一瞬の事であるため、少女が攻撃したと気付く者はいなかった。

そもそも、少女は人が多い場所があまり好きではない。

人の密集した場所では精霊術の精度は落ちる。精霊は非常に移り気で、より興味のある方へと移動してしまうのだ。普段であれば問題ないが、精霊術を使っている途中で移動されると、術が不安定になる。少女は精霊に好かれているため、そんな事は滅多にないのだが、念には念を入れていた。

元々、精霊術が使えなければ、少女はどこにでもいる孤児である。精霊がいなければ何もできない事を、少女は本能的に理解しているのだ。

しばらく花街を観察し、少女は疑問を覚えた。

雪が降っているにも関わらず、なぜ女の人たちは露出のある服装をしているのだろうか、と。

もう少し暖かい日ならばいざ知らず、夕方の冷え込む時間にそんな軽装をするなど、少女にして見れば自殺行為にしか思えない。実際、彼女たちは物陰で寒そうに震えている。しかし、近くを男の人

が通りかかると、しなを作り、男と共に店の中へと入っていくのだ。
何がしたいのだろう、と少女は首をかしげた。

「おや、どうしたんだい？」

声をかけられ、少女は振り返る。

そこには派手な化粧をした、妙齡の女性がいた。外にいる他の女性と同様、露出の多い服装をしており、その上に分厚い上着を羽織っている。手に持つ煙管からは紫煙が漂っており、変わったにおいを漂わせていた。しかし不思議と品があり、他の女性とは違うように感じた。

「観察してるの」

「観察？」

少女は女から視線を外し、通りを観察する。

「わたしの容姿を最大限に活用すると、奪い取りやすくなるっていつてたから」

「何が奪い取りやすくなるんだい？」

「色々」

私は通りにいる人々を観察し続けた。その間も、女は少女の隣にいた。一緒に通りを観察していると、しばらくして、女は口を開いた。

「何か分かりそうかい？」

少女は首を振った。

「分かんない。みんな、あんな恰好で寒くないのかな」

「そうだね。当然、寒いだろうさ。けど、それがあの子たちの仕事なんだよ」

「あなたも？」

少女は顔を上げ、女を見つめた。

言葉は少ないが意味は分かったのだろう、女は鷹揚に頷く。

「ああ。あたしもそうさ」

「なんであんな恰好をするの？」

女は煙管を吸い、冷氣とは違った息を吐き出した。

「さてね。あたしには分かんないねえ」

「そう」

そのまま二人は無言で人々を観察する。いくら観察しても、少女には何をどうすればいいのか、全く分からなかった。

日が傾きかけた頃、ところで、と女は口を開く。少女は女を見上げた。

「もうすぐ日も落ちる。今日はあたしの所に泊まってかないかい？」

少女はしばらく考えた後、頷く。

「でも、お金持っていないよ」

「別にかまやしないよ」

女は微笑みを浮かべ、背を向けて歩き出す。少女は内心で不思議に思いながらも、女の後について行った。

案内された部屋には毛の長い絨毯がひかれており、歩く度に柔らかな感触を返す。正面に設置されている暖炉には火が灯っており、部屋の中は温かった。

女は入り口で上着を脱いでいるため、今は露出の多い格好となっている。対して少女は上着を脱がなかったので、今も着膨れしている状態だった。しかし暑いのか、少女は首元の襟巻を外し、襟を緩めている。

「なにが目的なの」

少女は扉の入口から動かず、女を観察していた。唐突な言葉に女は驚くでもなく、少女に返す。

「騎士団を追い返したっていう術師に会ってみたかったんだよ」

「騎士団？」

聞き慣れない言葉に少女は首をかしげる。

「そ、国の命令で出てくる武装集団。基本的にこっちに拒否権はないんだけど、あんたはあっさり追い返しちゃったねえ」

「群れで行動する生き物は、統率するものがないと判断が遅くなるから」

「確かにそうだねえ。だけど、あの場合は予想外過ぎて混乱してたんだと思うよ」

「予想外？ なにが」

女は煙管で机の上に置かれている容器の縁を叩き、中の物を落と

す。女は妖艶に微笑んだ。

「集団に対して闘いなれてたってところが、ね。あんたは一体、これまで何をしてきたんだか」

「……別に」

「それと、精霊術を仕掛けるの、やめてくれないかねえ」

女が手を振ると少女が仕掛けていた精霊術が霧散する。少女は微かに目を細めた。

（術が無効化された？）

しかし、そんな事はおくびにも出さずに少女は答える。

「気付いてたの」

「自分の術の特性くらい、知っておいた方が良いよ。——ちなみに、あたしはこれだね」

女は手の平を上に向けると、その上に音もなく火が現れた。精霊が動いている事から火の精霊術だろう、と少女は判断する。

「氷が得意なあんたと、火が得意なあたし。無駄な事はしない方が良いよ。なに、取って喰やしないさ」

「……信用できない」

「受け入れなっ。相性が悪過ぎる」

少女は沈黙した。

少女の周囲の精霊たちがざわめき始める。少女は暖炉の近くにある火掻きを、女から目を離さず手探りで掴んだ。

「——氷結」

火掻きが氷で覆われ、次第にその大きさを増していく。長さも伸び、今では少女の身長と同じ長さとなっている。
女は眉を上げた。

「へえ、そういう使い方もあるんだね」

少女は氷で肥大した火掻きを手に、女に向かって走りだす。

少女は氷で肥大した火搔きを手に、女に向かって走りだす。
間合いに入ると少女は走る勢いを利用し、火搔きを横薙ぎした。
振り回されている印象は無く、無駄のない動きだった。しかし女に
当たる直前、氷結させた部分が一気に溶けだす。

「！」

少女は反射的に飛び退いた。

女は呆れたように少女を見る。

「言っただろ。あんたは氷で、あたしは炎。相性が悪いんだよ」

「相性？」

少女は眉をひそめた。

「自分の苦手な物くらい、覚えておいた方が良くないかい？」

精霊術に同調（ここでは魔力を供給し、その魔力に見合った術を
行使する事から、そう呼ばれている）する精霊は、術者と同じ空間
にいる精霊である。どの属性の術を行使しようとも、術の元となる
精霊は同一のモノなのだ。

元となる精霊が同じにも関わらず、精霊術に差が現れる場合、二
つの要因が上げられる。

一つは、単純に魔力の差。

魔力の量と精霊術の力は比例する関係にある。魔力の量が違えば
当然、能力にも差が出てくるのだ。

もう一つは、術の相性の問題。

一言に精霊術を使えるといっても、得手不得手が現れる。その極端な例は属性だ。同じ量の魔力を消費した場合、相性の悪い属性の方が圧倒的に不利となる。

今回の場合、少女は氷であり、女は火だった。

「氷は暑いと溶けるだろう？ もちろん、単純に火に弱い訳でもないけど、熱には弱いねえ」

少女は溶けた部分を撫で、再び氷結させる。微かに違和感を覚えるが、それを無視して少女は火掻きで女に突きを入れた。

「だから、無駄だって言っているだろう？」

再び氷が溶けだしていく。それにも構わず少女は突き進んだ。

「!？」

女は咄嗟に身体をずらす事で、少女の突きを避けた。火掻きの先端にある氷は、溶けきっていない。

「――氷結」

少女は溶けた氷を再び構成する。しかし、その構成速度は先程よりも遅い。気にせず、そのまま火掻きで女を薙いだ。

「――燃えな」

女が眩くと、少女の目の前が一気に炎上した。少女は反射的に飛び退いてしまう。

女は軽く息をついた。

「ずいぶん無茶をするんだねえ。もう、それを維持するだけでもキツイんじゃないかい？」

少女は無言で額に流れる汗を拭う。微かに息が荒れているのは部屋の中が暑い所為だろうか。

少女は窓の位置を盗み見ると、即座に駆け出した。

「帰るのかい？」

女は不思議そうに少女に尋ねる。少女は窓枠に手をかけ、目を細めた。

「どういう意味」

「泊めるって言っただろう」

女は火を消し去ると、少女に背を向けて寝台に横になる。その姿は無防備といって良かった。しかし、少女はそれを油断なく見据える。

「心配しなくても、こっちから襲いやしないよ。あんたが向かってくる、ってんなら話は別だけど。寝るんなら、それで寝な」

女は指で綿が詰め込まれている長椅子を示すと、羽毛布団を被って寝息を立て始めた。少女はしばらく女を警戒していたが、何もしないと理解すると、女に示された長椅子にふらつく身体を横たえる。そのまま深い眠りへと落ちた。

少女は一晚、女の元で過ごしたが襲われる事は無かった。女は何事もなかったかのように、出て行く少女を見送る。

「いつでも来な。歓迎するよ」

「……………何が目的なの」

少女は女を怪訝そうな表情で見ていた。女は煙管を口から離し、微笑みを浮かべる。

「知りたいんじゃないのかい？ 確かに、ここにあんたの求める方法はあるだろうねえ。けど、一人で見て学ぶより、実際に教えてもらった方が良いんじゃないかい？」

「そうかもね」

「だったら来るといいさ。教えてあげるよ。そんで、出来ればここで働いてもらえると助かるねえ」

少女は女のいる建物を見上げた。朝なのにも関わらず、時折、誰かの嬌声が聞こえてくる。少女は女に視線を戻した。

「寝不足になりそうだから良い」

「そうかい。それもそうだね」

お互いが同じ認識であるかは不明だが、意味は通じているので問題は無かった。

この日から少女は何日も花街にいる女の元に通う事になる。その際に教えてもらった言葉遣いのお陰で、少女の？お願い？と

いう名の恐喝が格段に成功率を上げたそうだ。そこに微笑みを加えると？お願い？はほぼ確実に成功するのだった。その事を知った少女は日頃から微笑みを浮かべるようになったという。

少女はこうして成長していったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3810y/>

氷の悪魔

2011年11月19日13時16分発行